

<1989年>

- 私たちの「意地」出産(改訂版 聖なる産声(正食出版))

## 私たちの「意地」出産

242

熊本県 中井俊作・續子

出産直前まで野良で立ち働いていた女たちの話、誰の介助も得ようがなくトイレで産み落とした話、戦場で逃げまどいながら夫婦でとりあげた話……それに比べて私たちはお産のもち方を選択できる恵まれた環境にある。

お産は病気じゃないのだし、医療機関に遠い過疎地に入ったことを考えれば、夫婦で取り上げるのはいかにも私たちにふさわしい。町に買い物に出れば自宅分娩に必要なものは手に入る。書店には助産婦さんの虎の巻も置いてある。定期検診に訪ねる医師からはアドバイスも受けられる。

自然なお産を迎えられるよう食養の勉強にも取り組んだ。子種を宿したのは、妻が玄米菜食を基本とした食事を始めて一年経過後。結婚前自炊していた私は五年を経ていた。自分たちの食べるものぐらい自給自足できる生活にも踏み出していた。食養の道は快いほどに有り難い出会いに恵まれ、自然出産をすすめる山縣先生との

ご縁もこの道中のことだった。さあ、ここまで来ればもう叶わぬわけがない。不安は勿論大きかったが、不安を越える意地があった。先生の身近で手ほどきは受けずとも…後は自然の摂理に身を委ね…。ところが事は筋書通りには運ばなかった。

予定日(九月二十五日)より二カ月以上も前(七月十七日)のこと、明け方に陣痛が始まって昼過ぎに出産。その間、定期検診に通っていた医師も心配して来宅。迷ったあげく、早期出産の危険には代えられぬということで陣痛抑制剤を注射したが抑えられなかった。医師が戻って程なく、もうイキまずにはいられないという妻の訴えに、足を開かせてみるとそこには既に黒い頭髪が覗いていた。未熟で体が小さいだけに分娩そのものはあっという間、二、三回のいきみのあとスルツと私の手のヒラに落ちてきた。『聖なる産声』を開き読みながらのヘソの緒結びであった。抑制剤の影響か、後産に時間がかかった。再び往診して来られた医師の指示で、助産婦さんがヘソの緒を引いて胎盤を取り出したのは二時間後のことだった。

早産の直接の原因は、どうやら自転車の振動と思われる。出産の一週間程前、所要で自転車にまたがった家内は、途中でちょっとした路面の凹凸を通過した。その時に、下腹でオヤツと思つた程度の異常を感じたという。多分この時、胎児の足先

243

か何かが羊膜を傷付けたのだろう。以来、野良仕事や家事で、かがむ度に小水の如くおり物があったという。現に分娩の際にはほとんど羊水が出なかった。必要な羊水を失って、やむなく分娩に至らしめたという生命の仕組みに違いあるまい。

ともあれ、それからが大変だった。身長三九cm、体重一六〇〇gの未熟児。医師は、すぐにでも未熟児センターに送らねばという。一晚考えさせて下さいといって心配する医師を見送った。「お腹の上で温めて、親の心音を十分に聞かせなさい。保育器には入れちゃダメよ。生命に縁あれば必ず助かる」とは電話での山縣先生。もう一人、遠い親戚の産科医は「君達がそこまで覚悟するならやって見給え。未熟児センター必ずしも万全とは言えぬ。法的な問題が生じたら力になろう」と言ってくれた。自力呼吸可能、乳首を吸う力もあり、季節は夏で保温は楽。答えは出ていた。

翌朝ダイヤルを回して医師に伝えた。「先生にご迷惑はお掛けしません……」と。私が勤め人だったらできることではなかったろう。その医師もしばしば来診して下さった。私たちに聞こえぬよう、回りが気遣いされたようだった。早く保育器に入れるように……？ 夫婦で交替で抱いて寝て、夕陽を選んで日光浴。新生児黄疸は

未熟児の場合重くなりがちで、それには赤外線の治療効果があると聞き、赤外線コタツにも入れてみた。一週間目には一二〇〇gまで落ち込んだ体重も徐々に持ち直し、出産予定日には二五〇〇gにたどり着く。苦勞したのはお乳の代わりと排便、そして心配する周囲への説得。お乳のほうは食事の工夫をした上、吸っても採んでも出が悪い。初めのうちはトナリの産婦からの貰い乳もしたが、とうとうスリバチ当たりが日課となって手作りのおチチが哺乳ビンへ。玄米ポタージュ・ゴマ・みそ汁・水アメ(または甘酒+麴から仕込んだ)が主材料。排便が自力でできるようになったのは、ちょうど出産予定日だった。それまでは体温計を肛門に差し込んで、刺激して出していた。

強度の黄疸の後遺症か「運動能力に大幅な遅れが認められる」と指摘されたのは三カ月目の保健所での早産児検診。「専門の養護施設に入園させよ」との勧告を辞退して、にわかに始めた家庭特訓。歩けるようになったのを確認して、「もういいでしょう。ここまで来れば。後はいずれ追いつきます」との言葉に安堵するまで一年余、月に一度の施設通いの保育となった。その娘も今は一年生。そこそこ元気にやっています。

二女は夏には二歳となるが、この娘は無事に取り上げた。私たちのお産に共感を寄せる町の保健婦さんと若い助産婦さんが、是非立ち会わせて貰いたいとのこと。身内の手のない私たちは大いに助かったことだった。長女も勿論手伝った。額の汗ふきと、乾く口に水を含ませるのが役目だった。助産婦さんの指導を得てヘソの緒が首に巻き付いていないことを確認し、会陰保護もうまくこなした。自然出産であれば、私のした介助は余計なお世話に違いない。月満ちてのお産とはいえ、妻も人並みの陣痛に喘いでしまった。介助しやすいようにと、車のリクライニングシートの利用を考えたのは私だったが、これは妻には不評であった。腰の座りが悪く、肝心な時にイキミにくかったとのことだった。いずれにせよ、頭と胴体を私の手に支えられた二女は皆の祝福の中に産声を上げた。身長四九・五cm、体重二七四〇g。後産も順調で、今度は乳の出も良く、まともな育児はこれほど楽かと夫婦で顔を見合わせたものだった。

山縣先生のすすめる自然出産に比べると、肩に力の入った構えたお産であつたらう。でも世間の常識の中で「夫婦で取り上げるお産」を実現するには（周囲も自分達も安心するように）この程度の構えは必要と思われた。これが私たちが自然

出産と言わず、意地出産という所以である。しかし、この意地出産にあたって山縣先生の存在と自然出産事例が、どれほど私たちを支え、励ましてくれたらうことか。

長女は「たお」、次女は「クノ」と名付けた。「たお」は道、道標となるように。「クノ」は九野、「九天九地を駆け廻れ」と。

### 〔追記〕

書き終えた原稿を妻に見せました。「私たち」という表現が気になると言います。なるほど、私の文章だけ読むと、いかにも息の合った夫婦がイメージされそうですが、現実にはそうではありません。社会の不自然さをやたらと意識する男と、お人好しの普通の女の組み合わせといったところでしょうか。妻が「子供が欲しい」と口にした時、私は夫である私を取り上げることを条件にしましたが、妻は農家の生まれ育ちで、自分の誕生自体が産婆さんが間に合わなかったような自宅出産でしたから（これは私も同様です）、このことに特別なこだわりはありませんでした。順調に進めば自宅で、異常が予測されれば病院で、といった程度でした。

異常事態を招くのは自分達の不明と不養生の結果と考える私とは、日常生活を送る上で意識(構え)の違いがありました。この違いは妊娠してから表面化し、お互いにずいぶん苦しみました。不自然な社会の中で、無自覚な自然体の危険を意識する私、そこまでしなくとも私の姿勢に息苦しさとお不自然さを感じる妻。よくまあ、ここまで一緒に来たものだ、と今更ながら神様の思召しに感心します。という次第で妻には気になる「私たち」ですが「私の」とする訳にもいきませんでした。

「家族でお産に取り組むのに、助産婦さんが立ち会ってくれる。そんな助産院があったらいいなあ」これは次女のお産の後、立ち会った保健婦さん、そして私たちの一致した希望でした。山縣先生、実現しましょう。(平成元年七月十五日)

◎ 中井俊作様は日本J-I協会合宿セミナーでご縁を頂いた方で、昭和四十六年当時、私はまだ現代医学栄養学から抜け出せないでいた頃でした。

熊本県で市長に出馬なさるほどの人格者で、真生活実践探求にも欣喜勇躍なされていて天竺村が自給自足を達成できたのも、中井様に善導頂いたおかげさまで。

最も偉大なことは、ご夫妻の愛の奉仕で真の自然分娩をなされたことです。中井

様のありのままの体験をお寄せ下さったのですが、自然にまかせて、自信をもってお産に臨んでいられるすべてのことに感激致し、敬意を表しています。

私のような至らない者の指導でも、医学博士の指導よりも重んじて実践して頂いたことに、頭が下がる思いで胸いっぱいです。自然のお産は神の儀そのものです。中井様は本当に神の儀をなされたわけです。これからお産なさる方は、胎教を立派に修められて、神の儀に臨んでいただきますよう祈念致しております。(山縣)